

海外の介護実態調査「ドイツ／フィンランド視察」 日本介護協会・新部会『国際交流部会』が、 世界の介護と交わる！



2017年9月4日(月)から11日の6泊8日で、ドイツ・フランクフルトからフィンランド・ヘルシンキの介護施設見学に行つてまいりました。今回訪問したのは、一般社団法人日本介護協会の新部会『国際交流部会』。メンバーは、理事長・左敬真、専務理事・渡邊仁、理事・中森章、三嶋頼之、他総勢6名です。今回の主たる訪問先は『Kursana Villa Frankfurt』、『Altenheim des St. Katharinen-u. Weißfrauenstift』、『ISO OMENA NEUVOLA』3ヶ所となりました。

要とする数が世界的に増えている今、なかでもトップクラスの長寿大国とされる日本でも例外なく急速な高齢化社会を迎えています。もちろん、急速な高齢化問題は日本だけのことではありません。高齢化対策への取り組みは各国様々であり、そういった対策のモデルケースを学び、日本に持ち帰ることは、超高齢社会を控える日本にとって、もはや急務とも言えます。日本の高齢化は日本だけに留まらず、今後アジア全体の問題にまで間違いなく広がっていくことが想定されています。今後の日本を見据えて、世界的に見ても介護に力を注いでいる2つの国に狙いを定め、理事長率いる国際交流部会のメンバーが調査をしてまいりました。

滞在の前半は、世界で初めて社会保険の仕組みを作り出し、介護保険を導入した国でもあるドイツへ。日本の介護保険制度の軸となるドイツの介護制度は、在宅介護を優先とした考え方で、日本の目指す『地域包括ケアシステム』のベースとも言えます。ヨーロッパは多様な人々が生活しており、ユーロ圏で黒字国として多くの移民を受け入れています。今後の日本のグローバル化を視野に入れた介護業界にとっても、学べき点は大いにありました。

空間——ホテルかと錯覚してしまうほどに広い敷地と清潔に整えられた施設内外装には、全員が一瞬言葉を失ってしまうほど、美しいものでした。館内のあらゆる箇所を巡っているうちに、美しさの理由が紐解かれました。日本では介護＝人間の尊厳を保つことであると考えられているものの、安全性に気を取られる傾向が強く、介護事故などのトラブル回避に力を注いでいます。一方、ドイツ人もベースが同じということはもちろんですが、尊厳を保つ為に最も重視しているのが『住居』なのだそう。そのため、日本の施設との一番の違いとして、安全面よりも

デザイン性に力を注いでいるのだそう。安全面にも手抜きはないものの、住居の充実こそがQOLの向上ともなり、その結果、自然とホテルのような空間となつていったようです。もちろん、屋内に留まらず屋外にもきちんと手が行き届いており、そういった配慮こそが、住まう人への尊厳に繋がっていることが分かりました。

■アポイント ②

Kursana Villa Frankfurt を後にし、その足で次に向かったのが、高齢者用住居『Altenheim des St.Katharinen-u.



Weißfrauenstift』。この『St.Katharinen-u. Weißfrauenstift』は、フランクフルトの市民からの寄付金で活動している施設です。集まった寄付金は、フランクフルトの女性たちを支援するために使用されており、多くの職員が女性のケアに力を注いで活動しています。この訪問におけるテーマは『人材採用』について。ドイツも日本同様、介護職員の確保が非常に難しい状況だそう。現在の取り組みの一つとして、ドイツ永住権を目標に旧ロシア圏のルーミアンブルガリア国の方々に看護士資格を取ってもらい、将来的に福祉業界に貢献してもらええる仕組みづくりを積極的に行っているようです。日本でも、外国人雇用はまさに今率先して行われていることもあり、国を越えた意見交換をさせていただく良い機会となりました。

■アポイント ③

調査も終盤に差し掛かり、最後に訪れたのは、フィンランドのヘルシンキにあるネウボラ施設『ISO OMENA





NEUVOLA。フィンランドは女性お母さんにやさしい国として知られており、女性であれば、誰もが出産育児において望むような環境整備が整っている国です。フィンランドは高齢化のスピードが比較的早い国ではあるものの、少子高齢化の日本とは違い、出生率は高い水準が保たれています。様々な理由が考えられるなか、大きな要因として考えられるのが、ネウボラという取り組み。これは、妊娠期から就学前までを支える『出産・子育て家族サポートセン

ター』として機能しており、妊娠に気付いた女性はず、近くにあるネウボラを訪れるところから始まるのだそうです。そこから複数回の検診だけでなく、出生後も頻繁に検診があり、必要に応じて管理栄養士やソーシャルワーカーとも繋がってもらえます。継続的な支援という安心感と、ワンストップのサービスによって、フィンランドの99%以上の女性が利用しているそうです。現在世界各国から視察の申し込みが殺到しており、私たちも例に漏れず今回訪問

させていただきました。急速に進む日本の少子化に反して仕事と家庭の両立が求められていますが、国による子育てサポートが十分ではないこともあり、生まれてきた子どもたちが虐待を受けたり、それによって亡くなってしまうたりすることもある残念ながら絶えません。児童の虐待死によって失われる社会的な損害は大きく、今後の穏やかな子育てには、このネウボラの取り組みが大きなヒントとなるはずです。

施設では主にネウボラの実態について伺いましたが、その仕組みは、想像以上に優れており、妊娠から出産、育児の期間が全てデータ化され、フィンランド国内であれば全てのネウボラがオンラインで情報共有しているという徹底ぶりに、組織力を痛感しました。住環境の変化があつた場合でも安心して子育てができる仕組みとなつていくという徹底ぶり、こういった仕組みが、結果的に高齢者への配慮にも繋がっているのだと感じました。

日本でもすでにネウボラをモ

一左理事長の所感一

ドイツでの自立支援の考え方として「可能性を引き出し関わりを増やすこと」を肌身で感じてきました。

まず、介護保険制度は、自立支援から社会参加という日本がこれまでに学び、試行錯誤を重ねている取り組みを、ドイツでは現場で自然に実践され、且つ生活リズムと環境、本人のアイデンティティーという最も大切な人権尊重まで、きちんと理念浸透していることに衝撃を感じました。

フィンランドでの視察は、制度の均一化が確立しており、本人の行動から制度が始動すること、事業者の関わりは本人の自己決定からなるが、国の制度がいかに国民に浸透しているかということが、顕著に理解することができました。

介護先進国である日本のサービスには、目に見えたホスピタリティーは進化しているものの、介護保険発足時の理念や意義を、各事業者がしっかり理解し関わり向き合うということがこの先に重要であると、今回の視察で改めて強く感じました。

デルとした取り組みは広がりつつあり、和光市や浦安市を初め、各市区町村で実践されています。確実とまではまだ言い切れないものの、導入している市区町村は福祉政策全体に成果を上げているようです。例えば、日本全体の高齢者人口に対する要介護認定率が過去5年で17・18%を推移しているのに対し、和光市の場合は9%台を推移しています。ネウボラの取り組みは理想的な子育てのあり方を行政が考えだしたものと

大きな指標の一つとなると確信致しました。

今回、3つの施設に訪問させていただきましたが、直接現地に訪問し、目の当たりにすることで、参考とすべき点が浮き彫りになるだけでなく、国の制度が国民にきちんと浸透していることに、改めて日本全体の課題を感じました。今後の日本の介護保険制度における考え方の、原点回帰となる視察となりました。